

井戸の毒殺：シオニストの生物学的戦争、国際法、そして植民地暴力の継続性

現代イスラエルの神話では、1948年の出来事はしばしば生存のための戦争、存在の脅威の中で国家が生まれた瞬間として描かれます。しかし、この物語の下には、戦争犯罪の暗く、十分に記録された歴史が隠されています——パレスチナの井戸や水供給の意図的な毒殺も含まれます。これらの行為は、孤立した異常な出来事ではなく、人口の追放、抑止、領土の統合というより広範な戦略の一部でした——この戦略は、今日、占領下の西岸での水インフラの破壊やガザの完全な封鎖を通じて続いている。

特に生物学的因子による水源の毒殺は、単なる戦場の戦術ではありません。それは国際法上の戦争犯罪であり、集団的な苦しみを引き起こす武器であり、人間の尊厳に対する犯罪です。

1948年当時、これらの行為はすでにハーグ第四条約（1907年）に基づいて違法でした——イスラエルは、義務の継続性とその後の加盟により、この条約に拘束されています。このエッセイは、シオニストの水毒殺作戦の記録された歴史、その法的影響、そしてナクバから現在に至るこの戦術の継続性を概説します。

1948年の生物学的戦争：政策としての毒殺

アッカ（1948年5月）：水中のチフス

1948年5月、シオニストの部隊がパレスチナの都市アッカを包囲した際、ハガナの秘密の科学部隊（ヘメド・ベト）がチフスに基づく生物学的因子を都市の水供給に導入しました。目的は、市民を弱体化させ、パニックを引き起こし、逃亡を加速させることでした。

- **方法**：実験室で培養されたチフス菌が市営水道システムに注入された
- **影響**：数十人の市民がチフスに感染。赤十字が介入
- **実行者**：ハガナの指導下にある131部隊
- **記録**：イスラエルの軍事アーカイブ、赤十字の記録、そしてベニー・モリス、アブナー・コーエン、トーマス・セゲブなどのイスラエル歴史家がこの作戦を確認

これは戦争中にシオニスト部隊が初めて知られた細菌兵器の使用でした。これは孤立した工作員の行為ではなく、市民を標的とした計画された軍事作戦でした。

ガザ（1948年6月）：失敗に終わったバイオテロ計画

アッカの直後、同じ部隊が当時エジプトの管理下にあったガザで同様のチフス毒殺作戦を試みました。この時、工作員は病原体を展開する前にエジプトの治安部隊に逮捕されました。

- **目的**：ガザの不安定化、アラブの増援の阻止、シオニストの影響力を示す

- **発見**：エジプト当局は細菌因子を押収し、工作員を逮捕
- **記録**：トーマス・セゲブの1949年：最初のイスラエル人、およびエジプトの治安報告

攻撃は失敗しましたが、複数の戦線で調整された生物学的戦争戦術の明確なパターンを示しています。

ビドウとベイト・スリク（1948年春）：村の井戸の汚染

ナクバの前段階で、エルサレムの北西にあるパレスチナの村——ビドウやベイト・スリクを含む——は、シオニスト部隊による地元の井戸の毒殺または破壊の試みを報告しました。これらの村はエルサレムへの供給ルートに戦略的に位置していました。

- **証拠**：フリド・ハリディが収集した口述証言と地元のパレスチナの記録
- **意図**：地元資源を利用不能にすることで人口を追放または帰還を阻止
- **結果**：村は最終的に無人化され、住民は逃亡または追放された

微生物学的な証拠は回収されませんでしたが（おそらく時間と破壊による）、このパターンは農村地域でのシオニストの破壊工作の知られた運用プロファイルに適合します。

AIN・カリム（1948年）：貯水池破壊後の集団疾患

エルサレムのすぐ西に位置するAIN・カリムは、ハガナの襲撃が村の貯水池を標的にした後、突然の疾患の発生を経験しました。

- **詳細**：襲撃の数日後に住民が病気になり、症状は汚染を示唆
- **未確認**：病原体は公式に特定されなかったが、集団疾患が広く報告された
- **出典**：パレスチナ赤新月社、生存者の証言

この事件は、心理的および生物学的戦術が組み合わせて使用された方法を示しています。害を与えるだけでなく、恐怖を植え付け、逃亡を促すためでした。

AIN・アル・ザイトウン（1948年4月～5月）：水インフラの破壊

ガリラヤでは、パルマッハがAIN・アル・ザイトウンを攻撃し、多くの住民を殺害し、残りを追放しました。その後、シオニスト部隊は村の井戸と水路を破壊し、帰還を防ぎました。

- **戦術**：焦土作戦——生物学的ではないが、長期的な追放を目的とした
- **出典**：イラン・パペのパレスチナの民族浄化

水源の破壊は偶発的な損害ではありませんでした。村を永続的に無人化するための計算された戦略でした。

より広範なガリラヤ：計画された泉の毒殺

公開されたIDFの記録は、シオニスト部隊がガリラヤの複数の村、特に停戦ライン近くの村で水源を毒殺または無効化する計画を立てていたことを示しています。

- **目的**：追放されたパレスチナ人の再浸透を防ぐ
- **手段**：水ポイントの破壊または計画された汚染
- **出典**：イスラエルの軍事アーカイブ、ヌール・マサルハとサルマン・アブ・シッタの作品で引用

これらの計画は、水の毒殺が「ダレット計画」という広範なドクトリンの一部であり、1つか2つの孤立した事件に限定されないことを示しています。

法的影響：国際法の複数回の違反

上記で説明された行動は、1948年の戦争時に有効だった国際人道法の明確かつ複数回の違反を構成します：

ハーグ第四条約（1907年）——批准され有効

- **条項23(a)**：「毒または毒された武器の使用」を禁止
- シオニストの生物学的攻撃（アッカ、ガザ）はこの条項を直接違反

国際慣習法

- 水源の毒殺と市民を標的にする禁止は、条約の批准に関係なく拘束力のある慣習法の一部
- これらの攻撃は、現代の基準に基づく戦争犯罪の閾値を満たす

生物兵器条約（BWC、1972年）——イスラエルは署名したが批准していない

- 生物兵器の開発、生産、使用を禁止
- BWCはナクバ後に発効したが、チフスの武器としての使用はすでにジュネーブ議定書（1925年）で非難されており、イスラエルはこれに署名していないが、より広範な法的規範を反映

ローマ規程（ICC、1998年）——イスラエルは署名していないが、占領パレスチナ領土に適用

- 水を通じた市民の毒殺は**条項8(2)(b)(xvii)**に基づく戦争犯罪として認定
- 国際刑事裁判所は占領パレスチナ領土に対する管轄権を認めている

戦術の継続性：井戸から封鎖へ

水の武器化は1948年に終わらなかった。それは進化し、イスラエルの占領インフラの中心的な特徴となりました。

西岸：入植者による水インフラに対する暴力

占領下の西岸のイスラエル入植者は、パレスチナの水タンク、井戸、灌漑システムを定期的に破壊または汚染します。

- **方法**：貯水槽への発砲、パイプの破壊、家畜の給水ポイントの毒殺
- **動機**：特にエリアCでの居住不可能な条件を作り出すことによる追放
- **保護**：しばしばIDFの護衛または受動的共謀の下で行われる
- **記録**：国連OCHA、B'Tselem、アムネスティ・インターナショナル

水の拒否は、1948年に使用された同じロジックに従う入植者植民地拡大の中心的な戦術となっています：生命を断つことで土地を支配する。

ガザ：環境および生物学的戦争としての封鎖

ガザでは、イスラエルは2007年以来完全な封鎖を課しており、境界や電力だけでなく、水浄化、衛生、医療インフラも標的にしています。

- **行動**：

- 下水処理場や淡水化施設の爆撃
- 水システムの修復に必要な資材の遮断
- 水ポンプの稼働に必要な燃料の阻止

- **影響**：

- ガザの水の97%以上が飲用に適さない（WHO）
- 子供たちは慢性の水媒介疾患に苦しむ
- 2021年、国連機関はガザを「居住不可能」と宣言

封鎖は、生命に不可欠な水を懲罰の武器に変えます。これは、1948年の毒殺された井戸で最初に展開されたドクトリンの現代的な継続です。

倫理的明確性：事実は憎悪ではない

「井戸の毒殺」という非難がかつて中世ヨーロッパで無実のユダヤ人の殺害を正当化するために使われた悪意ある反ユダヤ主義の誹謗であったことは事実です。しかし、シオニスト部隊による水の毒殺の実際の、記録された事例を認めることは、その誹謗を復活させることではありません。それは歴史的および法的事実を語ることです。

イスラエルの軍事および入植者戦術——生物学的戦争を含む——の批判は反ユダヤ主義ではありません。それは国際法、歴史的責任、そしてパレスチナの被害者の生き抜いた経験に根ざした道徳的義務です。このような犯罪に対する沈黙はユダヤ人を保護しません——それは戦争犯罪者を保護し、歴史を通じて本当の反ユダヤ主義の被害者を侮辱します。

結論：武器としての水、抵抗としての記憶

アッカからガザまで、破壊された村の井戸からガザの帯水層のゆっくりとした窒息まで、水を武器として使用することはシオニストの入植者植民地主義の論理を定義します。それは排除、抑止、支配の戦術であり、決して止まいません。

水を毒することは命を毒することです。そして、パレスチナの毒された井戸を思い出すことは、古代の誹謗を呼び起こすことではなく、現代の犯罪に立ち向かうことです——真実と法、そして水と正義が再び自由に流れることを求める要求とともに。